



TITLE:

言語地理学的手法をもちいた漢語
語彙史研究—新来事物を表す語を
手がかりに(Abstract_要旨)

AUTHOR(S):

鈴木, 史己

CITATION:

鈴木, 史己. 言語地理学的手法をもちいた漢語語彙史研究—新来事物を
表す語を手がかりに. 京都大学, 2016, 博士(文学)

ISSUE DATE:

2016-09-23

URL:

<https://doi.org/10.14989/doctor.k19945>

RIGHT:

学位規則第9条第2項により要約公開

京都大学	博士（文学）	氏名	鈴木 史己
論文題目	言語地理学的手法をもちいた漢語語彙史研究 ——新来事物を表す語を手がかりに		
<p>（論文内容の要旨）</p> <p>本論は、現代漢語方言における新来事物を表す語を対象として語形分布地図を作成し、言語地理学的手法を用いて分析することで、中国語の語彙がいかに成立・変化し、その過程は地理的分布においていかなる特徴を示すかを明らかにした。言語地理学は、複数地点の言語データにもとづいて、その地理的分布を地図化し、地理・歴史・文化などの言語外要素を結合させながら解釈することで、言語現象の通時的変化を再構成し、その原因を明らかにすることを特徴としている。従来の漢語語彙史研究においては、現代方言は直接的な考察対象ではなかった。しかし、言語地理学的手法は、文献的語彙史研究とは異なる資料を用いて言語の歴史を明らかにすることができ、従来の語彙史研究にはない角度から語彙生成・変化のメカニズムを解明することを可能にする。本論は言語地理学的手法を用いた漢語方言研究の漢語語彙史研究に対する有用性の一例を示すとともに、その成果を語彙史研究に還元しうることを示した。</p> <p>本論が分析対象とする新来事物とは、中国固有ではない事物、特に近代以降に他の地域から中国にもたらされた外来の事物を指す。中国語における外来事物を表す語は、事物そのものが受容される過程で音訳語だけでなく意識によって新語を創造する傾向がある。以前には存在しなかった事物が新たに導入される際に既存の語彙体系の中で独自の語形を形成していく過程は、それによって固有の既存語形の成立方式を類推することが可能となり、中国語の語彙の特質を考察するうえで重要な意義が認められる。</p> <p>本論は、序章・主要論考部分4章・最終章の全6章からなる。</p> <p>序章「本論文の意義と方法」では、本論の背景として漢語語彙史研究の現状と、言語地理学的手法による漢語方言研究の研究史を整理した後、本論の目的・方法及び本論の構成を述べた。本論に通底する問題意識は、次の3点に集約される。</p> <p>1) 語彙はいかに形成されるのか、その成立方式を明らかにする。</p> <p>2) 語彙が成立した後、いかに定着・消失・変化などの次の段階が決定されるのか、そのメカニズムを帰納する。</p> <p>3) 上記の過程は、語形の地理的分布においていかなる特徴を示すのか、語形分布地図にもとづいて明らかにする。</p> <p>このような問題意識のもと、主要論考部分では各章いずれも1つもしくは2つの新来事物を対象として、現代漢語方言における語形分布地図を作成し、言語地理学的手法と文献調査によって分析した。</p>			

第一章「方言分布から見る新語形の成立方式について——新来事物ジャガイモ・サツマイモを例として」では、新来事物を表す語がいかに関存語形と接触しながら独自の分布類型を獲得するか、その成立過程を明らかにした。考察の結果、新語の成立方式のパターンとして、関存語形に修飾成分を付加する「援用方式」と、関存語形をそのまま自らのものにする「転用方式」の2つを提示した。援用方式では対称項として関存語形を必要とし、新来事物と在来事物の呼称の分布が重なり合う。それに対して転用方式では同語衝突を回避するために相互の語形に操作が加えられ、同一地域で同じ語形が重複して用いられることはない。

第二章「新語成立における修飾成分の消長について——セッケンを表す語を例として」では、援用方式の成立過程が一様ではなく、成立後もそれぞれに定着度・影響力の強さが異なる点に着目し、「外来」を表す主要な修飾成分“洋”を有する語形のふるまいを分析した。修飾成分には一般に描写性と限定性の2つの性質があるが、在来セッケンから外来セッケンへと指示対象が交替するセッケン語形の特徴を利用して、特に修飾成分の弁別機能の性質を明らかにした。“洋”は在来事物を表す関存語形に弁別成分として前置されることで外来事物を表す新語を構成し、その新語と関存語形は二項対立をなす。在来事物が淘汰されて弁別機能を失うと、“洋”は脱落しやすくなる傾向があるが、語形式の構造によってその定着度は異なる。また、同じく“洋”を有する語形が地理的に隣接して分布する場合は、類推作用がはたらいて“洋”が保持される可能性がある。

さらに第二章では、援用方式と転用方式が任意に選択されるのではなく、援用方式から転用方式へ転換するという先後関係を有することを示した。また、その転換の要件として、援用方式の参照項に採用される関存語形が在来事物と外来事物をあわせた総称として機能すること、新来事物と在来事物それぞれの語形式の区別が保持されることなどを挙げた。

第三章「事物の呼称における多様性の成因について——コーリャンを表す語を例として」では、援用方式における修飾成分の描写性が語彙の成立と変化に際して果たす機能を考察した。修飾成分の描写性を要件として語形式が変化するケースがあることを示し、具体的事物を表す語形式の多様性、言い換えれば語形発展過程における非連続性が形成される一因を明らかにした。コーリャンを表す語には、2つの相反する方向性をもつ変化が観察される。1つは、語形式が定着するとともに、その成立時に有していた具体性・個別性が失われ、語形式に対する語源意識が希薄になる変化である。この変化は、語形式と指示対象との必然的関係性が失われることを意味する。もう1つは、語形式と指示対象との意味的つながりを強化し、言語記号の恣意性を低減しようとする有縁化であり、描写性の高い語素を付加することで、語形式の具体性・個別性を強化する。語形式と指示対象との対応関係に関わるこの2つの変化が相互に作用することが、語形式の多様性の成因の一つである。

第四章「漢語語彙の体系化過程について——トウモロコシを表す語を例として」では、コーリャンを表す語との比較を通して分析することで、第一章で提示した援用方式と転用方式を語彙体系の成立・変化という観点から再検討した。新来事物は類似する在来事物のいずれかに分類され、その在来事物を表す既存語形を参照項とした語形式を与えられる。新語は既存語形との関係の上で成立することで体系内部に組み込まれ、新たな語彙体系が創出される。新語と既存語形は二項対立をなし、類似する語形式を与えると同時に、同語衝突を回避するために意識的に両者を区別する操作を加える。いったん語彙体系が成立すると、たとえその構成員の形式が変化しても、他の構成員の語形式に操作を加えることで体系性を再調整する機制がはたらく。

最終章は、本論文の成果をまとめるとともに、同じく新来事物であるトマトを表す語の語形分布地図の分析を通してそれを検証した。また、語彙の伝播方式と分布類型、語彙の成立と変化という観点から新来事物を表す語の特徴をフィードバックした。最後に、今後の課題として漢語方言研究と文献言語学の統合の問題などについて言及し、文献的語彙史研究と言語地理学的研究では有用性を発揮できる領域が異なり、問題意識が共有されないことなどが統合の障壁となっていることを指摘した。

（論文審査の結果の要旨）

本論文は、現代中国語において新しい語彙が誕生し、既存の語彙体系内に定着する過程を明らかにするため執筆された。論者が採用したのは言語地理学的手法である。新語の成立というテーマに即し、論者は、中国に外から伝来したことが明らかな外来事物を示す語彙を複数取り上げ、当該語彙の現代諸方言に現れる語形の方分布を地図化し、分布特徴を読解分析する。論者がこの手法を用いて語彙史研究を行おうとする背景には、中国語の語彙研究が直面する大きな問題がある。中国の歴史的語彙研究は、古来より訓詁学をその主たる領域としていたが、そこでは難解語の語義解明と「正名」（複数の語義の中から本義を定める）が研究の中心であり、読解に問題とされない常用語や具体的事物を示す語彙は、研究の対象となりにくい。論者の関心は語彙の生成と変化のメカニズムを解明し、その普遍性を検証することであるので、中国既成の歴史的語彙論の手法ではなく、言語地理学の「すべての語は独自の歴史を有す」という原則と、「個別語の歴史には言語史総体が表現される」という立場を採用し、その方法論が中国語語彙史研究に有用であることを示そうと企図したものである。

第一章では、まず16世紀までに中国に伝来したサツマイモとジャガイモの語形を取り上げる。言語地理学がこれまでに解明した中国語基礎語彙の分布類型との対比を通し、それらの新来語が既存の語彙体系の中で如何に独自の地位を獲得していくかについて綿密な分析を行った。その結果、語彙の語形と地理分布には、既存語形に修飾成分を付加する「援用方式」と、既存語形をそのまま利用する「転用方式」の二つの類型が存在すること、さらに、援用方式では参照項としての在来事物を示す既存語形が必要であるため両者の地理的分布が重なり、一方の転用方式では同語衝突を避けるために、新来事物を示す語形は在来事物を示す既存語形と地理的な相補分布を成すことを、地図分析を通して明らかにした。これは、言語地理学的手法によって始めて解明しうる大きな成果である。また、歴史の浅い語でありながら、その語形と地理分布が明確な相関性を有し、しかも他の基礎語彙と同じ分布類型を取るのは、関連する既存語形が有する基層の独自性を反映するためであるとの指摘も、十分な説得力を有する。続く第二章ではセッケンを表す語形を取り上げる。ここでは、特に外来成分を担う主要語素“洋”に着目し、その語形内での性格が、分布環境によって変容する可能性を指摘する。セッケンは、既存語形に外来成分を付加する援用方式により語が形成されたことが読み取れるが、工業製品としてのセッケンの伝来によって在来製法によるセッケンが淘汰されるという、モノ自体が有する独自の性質も手伝って、地理的な分布状況は、早い段階でその語形が転用方式に転じたことを示唆する。その変容の過程において、既存語形との弁別のために付された臨時性の高い語素“洋”が脱落する場合としない場合が存在することに着目し、造語段階で語素“洋”が付加される場合と、類推などの外部的要因が働いて後から付加される場合とでは、転用形式の発展形

態に差異が見られることを指摘する。語素“洋”が有する造語力の高さを明らかにする上で興味深い指摘と言えよう。続いて取り上げる新来事物はトウモロコシであるが、当該語は多くの方言においてコーリャン語形と強い関連性を有している。そのため、論者はまず第三章で、長い栽培の歴史を有するコーリャン語形が見せる多様性を綿密に分析し、それが語としての成熟によって生じる語彙化と、それによって恣意的となった言語記号に新たな修飾成分を付加して具体性を強化する有縁化との、二つの相反する事象に由来するものであることを明らかにする。続く第四章は、第三章と緊密に関連しつつ、トウモロコシ語形について分析を行い、最初は穀物と認識されたトウモロコシが、栽培や流通の定着にともないコーリャンの一種と見なされ、構成要素を両者が共有する形で語彙体系が形成される過程を読み解いていく。トウモロコシ伝来後に既存のコーリャン語形に加えた操作（例えば“小”などの修飾成分）も、両者の語形が地理上で強い相関性をもって分布することと合わせ考えることにより、これらの語形の更新には、語彙体系を維持する必要も要因として機能したことが具体的に証明された。さらに、コーリャン語形で生じていた有縁化の契機が、まさしくこの新来事物トウモロコシの出現であることも、地理分布の相関性の中で指摘するのも興味深い。この指摘は、語彙化を巡る普遍的理論にも貢献しうるものとして高く評価できる成果である。最後に、論者の描く地図の視覚的な美しさに一言言及しておきたい。論者は論文中に述べるように、中国言語語地図作成のために開発された総合データベース「PHDシステム」により地図を作成する。地図化に際しては、記号や色彩の指定などの描画センスよりも、語形が示す多様性の本質を見抜き、それによって語形を的確に分類する能力が重要である。論者が描く地図が、客観的な言語データに依拠しながらも常に鮮やかで雄弁な分布パターンを示すことは、語彙形式から問題点を見抜く論者の能力の高さを物語る。

このように、本論文の成果は、歴史言語学の一方法としての言語地理学的手法が、現代方言学・また語彙史研究において有用であることを証明する大きな意義を有するのであるが、課題もまた存在する。論者自身も最終章で述べる通り、本論文の成果を、他の基礎語彙研究、さらに文献的語彙研究と結びつけての議論は現時点では不十分と言わざるを得ない。しかし、この問題は論者が今後研究を進化させる中で達成すべき課題であり、本論文の価値を損なうものではない。

以上、審査したところにより、本論文は博士（文学）の学位論文として価値あるものと認められる。平成28年6月23日、調査委員3名が論文内容とそれに関連した事柄について口頭試問を行った結果、合格と認めた。

なお、本論文は、京都大学学位規程第14条第2項に該当するものと判断し、公表に際しては、当分の間、当該論文の全文に代えてその内容を要約したものとすることを認める。